

エコエコアザラク

眼

Night 06

怪物

第3稿

脚本／小中千昭

Teleplay by Chiaki J. Konaka

2003／11／11

登場人物

黒井 ミサ(18)

田上 寛(38)……………興信所囑託調査人

山中 博美(22)……………ナレーター・コンパニオン

伊澤亮子……………『赤い部屋』主人

リリー……………同 アクトレス

リンダ……………同 アクトレス

宮田由比奈……………高校生

額田サキコ……………通り魔殺人者

接見弁護士

女性警務官

住宅街の女子高生

被害者の若いサラリーマン

若いカップル 男

同 女

放送局女性職員

四方田千砂の母

同 友人

番組司会者(声のみ)

超能力者

通訳

由比奈の家族(台詞無し)

○接見室／VTR映像

ダビングを重ねたVTR映像。タイム・コード表示。接見者は肩が僅かに見えるのみで、レンズは粗末な机の向こうに座った女を捉えている。

不揃いに切られた前髪に覆われ、表情は判然としな
いが、眼帯をしており、その下には刺青の模様が覗
いている。

弁護士「(オフ／書類を見ながら) 子どもの時から、あなたには見られているという感覚があったと」

女「……」

弁護士「(オフ) その、あなたを見つめる視線というのは悪意が込められたものでしたか？」

女「——悪意……、そうなのかな……。そうなんでしょうね」

弁護士「(オフ) ——その視線は——、どこからあなたを見つめていたんですか」

女「(顔を横に向け) ——どこでも……。ドアの隙間とか、壁の割れたところとか——」

○KJ探偵社／午後

椅子に座り電話を掛けている田上。

机の上には、黒井ミサの顔写真が載る、四方田千砂のファイル。

田上「——あ、もしもし、田上です。御無沙汰しております。——ええ、何とか——。はい……。ちょっとお聞きしたい事あって。あの、一年半前に失踪した、杉並の女子高生なんですけど——。(ファイルを一瞥) 四方田、千砂——。ええ……。この子、見つかったんですか? ——」

○『赤い部屋』

ソファにもたれているミサ。

ミサと対象側にじっと黙って座っている、リリー。

田 上「(オフ) 見つかってない? ——そうですか。いえ、ちょっと気になったもんで……。え、テレビ? それってど
んな——」

ミサはソファの前のテーブルに置かれた、水の入ったグラスを見つめている。

グラスの水の表面は、地震でも無いのに、波紋を浮べている。

ミサは、或る予感に顔を強張らせている。

○住宅街／夕刻

ひと気の疎らな路地。そこを歩いていく高校生程の少女。イヤホンで音楽を聞きながら歩いていく。

○『赤い部屋』

強張った顔で、コップの水面を見つめているミサ。波紋、一際大きく広がり——

○住宅街

少女の前に、突如飛び出してくる若い男!

少女「ニ ひっ、ひいひいひいニ」

男は瞼を閉じ、内側から血を流していた。

男 「眼が! 眼がニ」

男は必死に少女に縋る。

少女の悲鳴が住宅街に響き渡る。

○接見室 (VTR画面続き)

女、やや笑いながら喋っている。女の後ろには、女性警務官が座っているが、顔は見えない。

女 「——命令?」

弁護士「(オフ) その、あなたを見つめる眼が、あなたにその、

ああいった事をしろと」

女 「命令なんか、されてません……」

弁護士 「(オフ/資料を捲り) かしあなたは——」

女 「眼は、あたしに強制はしない……」

やや沈黙。

弁護士 「——一人目の、主婦の人の時の事を覚えてますか」

女 「……」

弁護士 「あれをやった後、その眼はあなたにどういう、その、指
示をしましたか」

女 「……」

弁護士 「もっとやれとか、そういった事——」

女 「もっと、欲しいんですか？」

弁護士 「(ややうろたえ) ——え？ いや(咳払い)」

○『赤い部屋』

リンダが部屋に入ってきた。

リンダ 「ママ、ごきげんよう——。(雰囲気) どしたの……？」

コップの表面に、今波紋は浮かんではない。

だが依然、ミサはそれを見つめていた。

亮子 「あなたは何にもあたしに話してくれない。一年前からの
記憶がない事以外——」

前に立った亮子を、やや驚いて見上げるミサ。

亮子 「その一年前より以前の事は、あなたは覚えているのでし
よ？」

ミサ 「——あまりに長い時間の事……。覚えていたくない事」

亮子 「——あたしは、未だ少女の頃に聞いた事で、忘れられな
い言葉があるの……」

リンダ 「え……？」

ミサ 「——」

亮子 「エコ、エコ——、アザラク……」

ミサ 「!?」

亮子 「黒魔術を使う少女が、この街には時々現れる——」
リンダ、ミサを険しい眼で見る——。

ミサ、立ち上がる。

亮子「アサメイという儀式のナイフを持ち歩く女の子——」

ミサ、ビケを手にとり、部屋を出て行く。

亮子「——」

○ワゴン車内

住宅街に停止しているテレビ局のワゴン車。音声担当が、コピー原稿を必死に黙読している博美にワイヤレスマイクを装着している。

美穂は緊張し余裕が無い。

ディレクター「五分後に一回中継入れるって。原稿入ってるね」

博美「は、はい」

カメラマンの方に戻ろうとするディレクターに——

博美「あっ、あのすみません！」

ディレクター「何ッ」

博美「(原稿示し)このバツバツのとは何て言うんですか？」

ディレクター「そこはこの地名だろ」そんなくらい自分で聞け

よ！初めてじゃないんだろ？あんただって——」

博美、思わず口ごもる。

ディレクター「(愕然／＼)なんてこった……」

騒然となっている住宅街のノイズ——。

○住宅街

男が眼を切られた路地。第一発見者の女子高生が泣きじゃくりながら、警官の質問に答えている。

ディレクター、インカムのマイクを甘く塞ぎ

ディレクター「幾ら急だからって、いきなりシロート回してくんなよなあ！水着着てチャラチャラしてた様な女が現場でいきなり喋れるかよ！」

T K「(無線越し／＼)中継いきます。5秒前、4、3——」

ディレクター、博美にCUE。

博美「本日午後3時頃、ここをサラリーマンの若い男性が通り

掛かったところ、突然鋭利な刃物で両眼を切られるという恐ろしい事件が発生しました」

澀みなく、レンズを見据えた博美、堂々たる喋り。

ディレクター「——（やや感心）」

博美「この手口は、三カ月前に発生した、やはり眼を狙った連続通り魔事件のものと酷似しておりますが、その時の犯人であった女性は既に逮捕されており——」

○接見室（VTR画面）

弁護士「（オフ）——どうして、他人の眼を切るのですか。そうする事があなたにとって、どんな意味があるんですか」

女「——眼は——、人を犯す……」

弁護士「（オフ）え？ どういう事です？」

女「視線で、男は女を犯し、女は男を犯すんです……」

弁護士「（オフ）つまり、あなたはそれを処罰する為に眼を損壊させた」と

女「——」

と、弁護士、突如ややうろたえ頭を動かす。

弁護士「（オフ）今、私が見ているのも、犯す事になるんですか」

女「——」

髪に隠れた女の口元が僅かに覗く。赤く薄い唇が、三日月の様に笑みを浮かべた。

○高速高架下

独りいるミサ——、ベンチに座っている。

傍らには、ビケがいるだけ。

▼前話フラッシュ／千砂の名で呼びかける田上

ミサ「——四方田、千砂……?」

○MGFテレビ局外観

田 上「(オフ) 先程ご連絡した、興信所の者ですが——」

○プレビュー室

若い女性局員に案内され、狭い部屋にオフライン編集機だけが置かれた部屋に入る田上。

女、ライブラリのテープをデッキに入れて操作。

女性局員「——ここからです」

田 上「お世話かけました」

女性局員は出て行く。

田上、小さなモニタに身を乗り出して見入る。

画面には、テレビ番組が映し出される。

○過去のテレビ番組『失踪者を超能力者が探す! 3』

四方田千砂の、明るく微笑んだ家庭用のビデオ映像が流れます。友人と撮ったものらしい。

屈託の無い、明るい高校生の少女——。

司会者「四方田千砂さん、17歳。昨年十一月十四日、学校から帰宅途中、行方が判らなくなりました——」

○繁華街／夜

喧騒と混沌——。

その中で、ポツンとビケの耳を持って立つミサ。回りの雑踏の動きの中で、孤立している。

『あたしは——誰……?』

○プレビュー室

テレビ放送のテープを見つめる田上。

画面には友人が映っている(顔にはモザイク)。

少女「千砂は——、とっても明るくって、可愛くって、みんなから好かれてたし……。勝手にいなくなったり、自殺す

る様な子じゃないって——」

田上は眉を顰め、その少女の語る千砂と、自分が出会った少女との落差に困惑している。

田上「(呟く)別人……なのか……?」

○接見室 (VTR画面)

弁護士「(オフ)——他人の眼を、剃刀で切るっていう時、どんな気分がするんですか」

女「気分……。別に……」

弁護士「(オフ) 気持ちがいいとか、悪いとか」

女「そう……。切るとき、切られる人の気持ちが判るんです」

弁護士「(オフ) え……」

女「切られる人は、これから自分の眼が傷つけられて、これから何も見る事が出来ずに一生を過ごすんだって事が判るみたいです。だから、すごく悲しんでいる……」

弁護士「(オフ/絶句)」

女「剃刀の刃が、白目のところからスツと入っていくと、その瞬間だけ、切られる人はじっとしてます。みんなそう。そこで動いたら、もっと痛くなるからかもしれないけど」

○イメエジ映像

卵の中身——。

その黄身に、デザイン・ナイフの刃先が近づく。刃が触れても、表面張力ですぐに黄身は切れない。

○接見室 (VTR画面)

弁護士「(オフ) もし捕まっていなかったら、これからも続けるつもりでしたか?」

女「——」

弁護士「(オフ) 質問に答えて貰えませんか」

女「——だって——、あたし、未だ完全になっていないし」

弁護士「(オフ)完全に、何になるというのですか？」

女、ゆっくりと、顔を、カメラのレンズに向ける。
髪に分かれ目から、ギラギラとした眼が覗く。

女警護官「(オフ)額田さん？ 額田サキコさん？」

女の躰、激しくブレ始める。ビデオのシャッター開
角度を越えた激しい動きに、ブレとしか見えない。

弁護士「(オフ)ああっ！ ああああッッッ！」

カメラ、三脚ごと倒され、画面が転倒。

何が起っているのか、凄まじい物音と怒号、悲鳴。

○プレヴェウ室

画面には、白人の中年女性が映っている。

日本地図上で、ダウジングの振り子を振っている。

超能力者「——(何事か言う)」

通 訳「(オフ)千砂さんは残念ながら、死んでいるそうです」

超能力者「——(何事か言う)」

通 訳「(オフ)誰かに殺されたと言っています」

斜に構えて見つめていた田上、操作盤のボタンを押
してテープを止める。

○繁華街裏路地

人目を気にせず抱き合う若い男女。

クスクスと何事か笑い合いながら、互いの躰を密着
させている。

と、突如男の髪が後ろからとてつもなく強い力で引
っ張られ——、倒れ込む。

女 「武!？」

啞然と尻餅をついた若い男、自分を引きずり倒した
者を見上げる。

男 「(怒)てめっ、何すんだこの野郎！」

断髪に眼帯、顔から首にかけてびっしりと刺青が彫
られた女が、じっと立って見下ろしていた。

男、起き上がろうとしつつ

男 「えれえムカつくこいつ！ なあ、俺キレてもいよな？
いいよな？」

女 「やめなよ武！」

と！ 女、若い男に跨がり、腕を抑え込む。

男 「てめえっ！ どけよ」 ブツ殺されてーんか」

女——、若い女の方に眼を向ける。

若い女「ひっ！」

逃げ出す若い女。

男 「ヤスヨ！ おい！ どこ行くんだこのバカ！」

男に跨がった女、ビルの亀裂をじっと見つめている。

男 「何してんだよ！ どけよ」 どけっつんでんだろ聞こえ
ねーのかよ」

○サキコPOV

ビルの壁面の亀裂を見つめるサキコの片目の視点。
その亀裂——、漆黒の翳の中に——、こちらをじっ
と見つめる眼の光——。

サキコ「(オフ)——今度こそ、こいつの眼を切ったら、あなた
が言う人と会えるんだね……？」

○繁華街路地裏

男 「誰と話してんだよ！ どけよ！ もう頼むからどいてく
れよなあ！」

サキコ、男を見下ろす。

男 「！(怯え)」

サキコの顔、髪で見えない。

○由比奈の家／キッチン

由比奈、自室から出てくる。家人が点けているテレ
ビに、博美が映っている。

画面に浮かぶ、モノクロの女の顔。物静かな、普通の若い女。

博 美「(オフ) 繰り返します。本日起こった、男性の眼をナイフの様なもので切りつけるという事件ですが、三カ月前に起った連続通り魔事件で逮捕拘留中の額田サキコ容疑者が、拘置所から脱走して行っているという可能性が強まりました。拘置所では脱走を許した責任について——」
由比奈、冷蔵庫からジュースを出して飲みながらテレビをぼうつ、と見ていたが、自室に戻っていく。

○由比奈の部屋

入ってくる由比奈。

机の上には——、不気味な蠟の人形。その眼には針。
由比奈「——(微笑)」

○拘置所接見室 (VTR画面)

静かになっている接見室内。傾いだままのカメラ映像——。

と——、ぬっとレンズを覗き込むサキコ。
ニッ——と笑った。

○イメエジ

卵の黄身に触れていたナイフの刃先——、力が加わり、表面張力を破って黄身の表面を裂いていく。
トロリ、と黄身の内容物が零れだしていく。

○『赤い部屋』

水の入ったコップ——。
その表面に波紋が起っている。
ソファでは、リリーにもたれてそれを見つめている

亮子——。

○高架下公園

ベンチに座らされているビケ——。ミサはその前に立ち——、人指し指で小さく五角の印を切り、小さく口の中で呪文を呟く。

ミサ「——レンプレ・トール、ニムダ・トール——、レイゼン・イクス・フテイグン——」

と——、生きてる者ではないビケが——、命を受けたかの様にビクンと動く。

その間もミサは呪文を小さく呟き続け、強い意志の力が籠もった眼でビケを見つめている。

ビケ、ガクガクと頭を揺らし、仮初の命の息吹きに苦悶しているかの様。

ミサ「——」

呟く事をやめるミサ。

ビケは未だもがいている。

ミサ「——あなたはただのウサギ——。作り物——。あたしの友達になんか、なれない——」

○サキコPOV

繁華街路地裏、両目から血を流してぐったりとなっている若い男を見下ろしている。

と、サキコの視線は、闇の亀裂を探す。

しかし、ビルの壁面割れ目にも、ビルとビルの隙間の闇にも、サキコを導く『眼』がない。

サキコ「(オフ) どこに——どこに行ったの？」

サキコ、ハッと見上げる。

ビルに囲まれた空の闇——。そこに覆わんばかりに巨大な一つの眼がサキコを見下ろしていた。

サキコは笑みを浮かべ、眼を見上げる。それが彼女にとっての、救い主であるのだから。

と、巨大なる瞳孔の闇の深淵より、赤い光が広がる始めた。サキコの視界はその赤に染まっていく――。

○高速高架下公園

ミサ、指の印を解き――、
ビケを見つめていた瞳から力が消えて閉じる。
と、ビケは操る糸が切れたかのように、その仮初の命を失って力なく横たわる。

ミサ「――こんな事をする為に、あたしは生きているの……？
あたしの持つ魔術の力――、何の為に……？
人を救う為――？ あたしはそんないい人？――
あたしは――誰……？」
それに答えられる者は、そこにはいないのか――

ミサ「――！」
既に術を解かれた筈のビケが、僅かにまた律動している。

ミサ「ビケちゃん……？」
ビケは、その頭を上に向けていく。
ミサ、ハツとなって上を見上げる。

ドオオオンンンン
天空に広がる巨大なる『眼』

ミサ「――！ あなたが――、ずっとあたしを見つめていたの……！？」
誰――！？」
赤い光が、瞳孔から降りていく。それは、そこから見えるビルの向こうへ。

ミサ「――」

○杉並／住宅街

一角にある、『四方田』の表札。

○四方田家／リビング

田上、千砂の母親から話を聞いている。

未だ若く見える母親——、しかしその顔は哀しみに暗く沈んでいる。

明るく笑った千砂——ミサの顔が映った写真がテーブルの上に。

千砂の母「——あの子は——、あたしたち親の前では、本当にいい子で——」

田上「——前では——、と言いますと」

千砂の母「警察の方が、色々と千砂の事を調べたみたいなんですけど——、なんかあたしたちが知らない面があったかもしれない、って……」

田上「——日記、か何か……?」

千砂の母「——」

○同／千砂の部屋

綺麗に片づけられている部屋。

机の上に、ノート・パソコン。

千砂の母「——中のハード・ディスク、いなくなる直前に、綺麗に消されてたんです」

田上「それは——、千砂さん本人がやったんですか」

千砂の母「——らしいです。ここに他人が入ったりしませんから」

田上「——その中にも、お母さんが知らない人との、例えばメールの記録なんかが入っていた——」

千砂の母「じゃないかって、警察の人が……」

低く呻く田上。

千砂の母「でも——、あの子がこの家を黙って出なきゃいけない理由なんて、本当に見当たらないし——。大学も推薦が決まっていたから……」

ポロポロと、涙が零れだす。

千砂の母「——ほんとに普通の、いい子だったのに……」

田上「——」

○台場近くの港湾部

おおおおおんんんんん——
海獣の咆哮の如き音が、潮に乗って聞こえてくる。
ミサは赤い光の筋が導く場所にまでやってきた。
ふと振り向くミサ——。
レインボー・ブリッジを背に、巨大なるゴシックな
双頂の門が幻としてそこに聳えていた。
と——、ミサの頬に光が突き刺す。

ミサ「！」

それは——、やや前方に立つサキコが持ったナイフ
の反射する光だった。
赤い光の柱は、二人の間に注いでいたが——、消え
ていく。

サキコ「——その眼だ……」

ミサ「——」

サキコ「——ずっと探してたんだ、その眼——」

サキコ、眼帯を外す。刺青が彫られた半分側に、お
ぞましい眼——、異常に小さな瞳孔の蒼白い眼球が
見開いて、ミサを見つめている。

ミサ「——あなたを動かしているのは、誰——？」

サキコ「——（ニタアリと笑う）」

○テレビ・ニュース画面

モノクロの額田サキコの顔が大きく映し出されてい
る。

博 美「額田サキコ容疑者は、都内飲食店で働いていましたが、
三年前より無職となり、独りで生活していたものと見ら
れています。彼女の周囲では、物静かな礼儀正しい女性
との評判で——」

○港湾部

ミサ「——あなたが何をしてきたのか、知りたくもない。けど、あなたはどんどん自分からおぞましい怪物になっていった。そのあまりに強い闇の力——」

サキコ「キイイイイイツツ」

サキコの躰、突如ブレる。急激に不自然なる動き。

ミサ「!?」

サキコ、いつの間にもミサのすぐ眼前に立ち、ミサの眼目掛けデザイン・ナイフを切りつける。

ミサ「あうっ！」

腕力がある訳ではないミサ、辛くも逃れるが、獰猛な肉食動物の如きサキコの動きは、ミサが逃れようとする先を封じる。

ミサを地面に押し倒し——、跨がるサキコ。

ミサの手は必死に、傍らに落ちたビケをとろうとしている。

サキコ「——この眼が人を犯す！ この眼が人を誤らせる！ この眼をあたしのここに入れるの」

ミサ「——」

ミサは——明らかに怯えている。

恐怖——、光を奪われる恐怖——。

と、その二人を見つめる第三の視点——。

その存在を知られず、ミサに跨がるサキコの脇に立っている、もう一人の、ミサ——。

もうひとりのミサ「(淡々と)——怖がってる……。何に……？」

あたしはこんな、獣じみた力に怯えて、泣くような存在だったの……？ これが、黒井ミサ？ これが、魔女？」

サキコの持つ刃、振りかざされた。

頭を抑えつけられているミサ——、それを見上げていたが——、怯えていたその表情——、瞬時にかき消え、鉄の意志と心を持った、黒井ミサとしての心に戻った。

サツ、とビケの腹部をまさぐるミサの手。

